
さながらそれは、熟れた石榴が落ちた後の様に。

くまっ！

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さながらそれは、熟れた石榴が落ちた後の様に。

【Nコード】

N7190H

【作者名】

くまつ！

【あらすじ】

俺の彼女――美――彼女が俺の部屋に来るとき、俺が取った行動とは・・・。

「達也あゝ居るんでしょ」

一美だ・・・。

俺にようやくできた理想の彼女。

好きで好きでたまらない、愛しい人・・・。

・・・でも・・・

彼女とは会いたくない。

いや、もう会えないんだ・・・。

――・・・――

居留守を決め込む。

もう彼女とは会わない。

「もう、居るのは判っているんだからっ」

一美は俺の決意などをまるで気にしないで何時もの様に明るく呼び掛けてくる。

「早く開けてよお」ドアノブを激しく動かす。

静な部屋中に響き渡る金属音。

「見いつけた」

新聞受けから覗き込む二つの瞳。

ああ、一美の愛らしい瞳だ・・・。

まるで吸い込まれるかの様な、目・・・。

俺の視線に一枚の紙が入ってくる。

そう・・・俺は・・・

―・・・帰ってくれよ―

そうだ！会っては行けないんだ・・・

―美と会ったら俺は・・・

「どうしてっ!？」

予想外の返答だったのだろうか、急に声を荒げた。

―・・・もう会えないんだ―

判ってくれよ・・・

「なんで？訳が判んないよっ!？」

―美の声が震えている。

泣いているのだろう・・・

―俺たちは別れるべきなんだ。―

本当はこんな事を言いたくはないんだ。

・・・本当は・・・

「!？他に好きな人が出来たのね・・・」

―ちがうっ!―

本心からの言葉・・・

本当は会いたくてどうしようもない。
けど・・・

――本当に違うんだ……

まるで、小さな子供に諭す様に俺は一美に声をかけた。

「なんで？達也が言ってる事わんないよ……」

嗚咽に混ざり時折、鼻をすすする音もする。

――俺たちは住む世界が違うんだよ――

そう、これが理由。

「そんなの関係ないじゃないっ！私は貴方が大好きなのよっ！」

――……駄目だ――

「酷いっ！結局達也は私の事弄んだのねっ！」――違うっ！そんな事はないんだっ――

永遠に続く様に思われた、問答に終止符を打ったのは意外な声だった。

「吉田さーん、困るんだよねえ」

いきなり割って入ってきた聞き慣れた声。
大家さんだ。

「痴話喧嘩なら他でやってくれないかねえ。ただでさえ他の住人から苦情が来てるんだ。このまま警察沙汰にでもなったら出ていってもらっつよ？」

この前ゼミの仲間と宴会をやって警察を呼ばれてしまったばかりだ。その時に大家さんに手酷く怒られ、次はないと釘を刺されてしまった。

—これには事情があるんです—

これは不味い……。

「ハンツ、少しはこっちの事情も考えておくれ！10数える間にドアを開けるか、荷物をまとめるかしておくれよ。」

大家さんの怒気混じりの声が響き渡る。

……大屋さんがいる以上、一美も滅多な事はしないのでは無いか……。

仄かな希望が見えた気がした。——……わかりました、開けますよ……—

希望にすぎり、俺はドアを開く。
ドアに貼った紙が破れる音がした……。

「やっと会えた……」

目の前に居るのは、一美一人。

「もう離さない」

何故だろう……。

大家さんの影も形もない……。

「達也、大好き」

頭が回らない・・・。

・・・嗚呼、俺も・・・好きだ。

「今すぐ食べたい・・・」

俺も一美に食べられたい・・・。

目の前には一美がいる。

もう何も考えたくない・・・。

もう何も考えられない・・・。

翌朝、始めに異変に気付いくものは見るだろう。
部屋に出来た大きな血溜まりを・・・。
さながらそれは・・・。

（後書き）

拙い文章で申し訳ありません。ご意見等頂けましたら幸いです。また、練習を兼ねての即興で書いた物ですので、文章がおかしな部分もあると思います。重ね重ね御免なさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7190h/>

さながらそれは、熟れた石榴が落ちた後の様に。

2010年11月23日02時35分発行